

令和8年度札幌市総合教育会議

- 1 日 時 令和8年9月2日（水）13時30分～15時00分
- 2 場 所 札幌市役所本庁舎12階1～3号会議室
- 3 出席者 札幌市長 秋元 克広
副市長 加藤 修
教育長 山根 直樹
教育委員 佐藤 淳（教育長職務代理者）
道尻 豊
中野 倫仁
朝倉 由紀子
田中 あい
- 4 事務局 教育次長 廣川 雅之
総務部長 手塚 圭希
学校教育部長 佐藤 圭一
調整担当部長 吉田 憲史
教職員担当部長 児玉 麻知子
総務課長 新津 明久
教育課程担当課長 山下 敦史
学びのプロジェクト担当課長 上野 千沙
高校再編準備担当課長 久保 和也
教職員育成担当課長 村岡 美千世
労務担当課長 阿部 大輔
教育政策担当係長 石川 亜樹
教育政策担当係長 阿久津 誠
学びのプロジェクト担当係長 村山 拓己
高等学校担当係長 西野 功泰
高等学校担当係長 坂間 卓朗
労務係長 山岸 大志
労務係員 山下 剛
労務係員 稲田 裕輔
- 5 傍 聴 11名
- 6 議 題 これからの高校教育について ～札幌市立高校のミッション～
- 7 報 告 札幌市立学校における働き方改革プラン策定について

○手塚総務部長 教育委員会総務部長の手塚です。ただいまから「令和8年度札幌市総合教育会議」を開会いたします。

最初に、本会議の位置付けについてご説明いたします。この会議は「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」により、設置が義務付けられた会議となっております。また、「教育の大綱」の策定や、教育条件の整備等、重点的に講ずべき施策について、市長と教育委員会が協議を行うため市長が招集する会議でございます。なお、本日の議事については、後日、ホームページにて公表いたします。

それでは市長からご説明等をよろしくお願いいたします。

○秋元市長 本日はご出席いただきましてありがとうございます。教育委員会の皆様には、日頃から札幌市の教育行政に関して熱心にご議論いただき、ご尽力いただいておりますことを、この場をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。

さて本日の議題は、「これからの高校教育」をテーマとさせていただきます。市立高校におきましては、平成29年に策定した「札幌市立高校教育改革方針」に基づき、全校共通の取組とともに、各校の特色化に向けた取組を進めてきたところであります。この間、新たな学校ができたり、学科ができたりと、生徒の個性を伸ばしていく取組として、市立高校は一定の役割を果たしてきたところでありますが、様々な形で社会情勢が変化しておりますので、この状況変化に対応していくために、次期方針の策定に向けた検討を進めているところであります。本日は、その内容についてご報告をいただきながら、皆様と意見交換をさせていただければと思っています。

方針策定につきましては、今後どのような人材育成が望まれるのかということが大きなテーマになってまいります。そういう意味では、子どもたちをはじめ、保護者や学識経験者、教育関係者など、様々な方からご意見をいただきながら方針を作っていくことになろうかと思います。

本日は、総合教育会議の中で、教育委員の皆様と意見交換ができればと思っていますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。それでは、最初に事務局から説明をお願いいたします。

○手塚総務部長 本日の流れについて説明いたします。まずは、事務局より「(1)高校教育を取り巻く現状」「(2)市立高校改革のあゆみ」についてご説明いたします。次に、「(3)卒業生の声」として、市立高校を卒業したお二人から、高校生活で得た学びについて発表していただきます。その後、一度質疑の時間を設けます。

後半は、再度事務局より「(4)これからの市立高校について」をご説明いたします。最後に意見交換の時間を取らせていただく流れといたします。それでは、所管部より説明をお願いします。

○佐藤学校教育部長 学校教育部長の佐藤でございます。次期高校改革方針の策定にあたっては、これからの札幌市立高校が、今後10年先、20年先を見据えて果たす

べき役割や、取り組むべき方向性などについて、外部の有識者からなる「検討会議」と、現場の教職員からなる「ワーキンググループ会議」を設置し、協議を進めているところです。本日は、その協議の中で現在検討している、札幌市が目指す新しい市立高校のあり方やカタチについてご説明いたします。

まずは、今後のあり方についてご説明する前に、その前提となる「(1)高校教育を取り巻く現状」と、これまでの「(2)市立高校改革のあゆみ」からご説明いたします。「高校教育の役割」ですが、現行の学習指導要領では、社会に出てからも学校で学んだことを活かせるよう、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力」、「学びに向かう力、人間性」の三つの力をバランスよく育むとしておりますが、高校段階では、生徒一人一人が自己の進路を切り拓き、社会の担い手として自立していけるよう、小・中学校で培った基礎の上に、高度な普通教育や専門教育を行う、義務教育と社会・高等教育をつなぐ「架け橋」としての役割を担っております。その高校教育の一層の充実を目指すうえで、踏まえておかなければならない「高校教育に関連する動きや課題」について、いくつかご説明いたします。

一つ目は、学習指導要領の改訂に向けた動きです。約10年ごとに見直しが行われる学習指導要領ですが、現在、中央教育審議会において改訂に向けた審議が進められております。スケジュールとしては、今年の冬頃までに審議を取りまとめ、答申される予定であり、高等学校においては令和9年度末に改訂、周知・先行実施期間を経て、令和14年度から学年進行で順次実施される見込みです。論点整理の中で示された改訂のポイントでは、生きて働く知識・技能の習得に向けた「主体的・対話的で深い学びの実装」や、一人一人の可能性が開花し、個性が輝く教育の実現に向けた「多様性の包摂」、「実現可能性の確保」に向けた教員と生徒の双方に「余白」を生み出す工夫など、現場が今まさに直面している課題に向き合う内容となっております。高校の次期学習指導要領への移行はまだ先ですが、その底流にある新しい教育観を先取りし、本市における高校教育改革の中にも積極的に取り込んでいく必要があります。

次に、国の高校教育改革に向けた動きです。文部科学省では、今後一層深刻化する少子高齢化や、将来的に予想される労働力需給ギャップ、産業界が求める人材の変容を見据え、今年の2月に「高校教育改革に関する基本方針」、グランドデザインを公表いたしました。これは、高齢者人口がピークを迎え、労働人口が急減する2040年を見据え、国全体として進むべき方向性を定めた共通ビジョンです。この方針の中では、今後高校改革を推進していくうえでの「三つの方向性」を提示しています。一つ目は、主権者として「AIに代替されない能力や、一人一人の個性を最大限に伸ばす」こと。二つ目は、「経済・社会の持続的な発展を支える人材を育成する」こと。そして三つ目が、「多様な学習ニーズに応える教育機会をしっかりと確保する」こと。この3点を主な方向性とし、全国の高校教育の進化を求めています。次に、国がこのグランドデザインを定めるに至った背景でもある、「中学校卒業生数の減少」と「2040年の就業構造推計の概要」について、ご説明します。

まず、全国の中学校卒業生数の推移ですが、これまで100万人を超えて推移してきましたが、令和11年には100万人を下回る見込みです。その後も減少を続け、令和21年には約70万人となり、令和6年と比較して約34%も減少する見込みです。

次に、札幌市が含まれる石狩学区の状況ですが、全国との状況と比較すると、少子高齢化の影響が出るのはやや遅く、数年は増減を繰り返しながらほぼ横ばいで推移しますが、令和14年以降は一気に減少に転じる見込みです。令和22年度には、令和8年度と比較して7,713人、約4割近くも減少する見込みであり、現行の1クラス40人で換算すると、192クラス分に相当し、現在の公立と私立の定員割合を元に計算すると、公立高校だけでも124クラス分の減少が見込まれます。

続いて、将来の就業構造推計に基づいた、労働力需給ギャップについてです。国の予測によれば、人口が減少しても、全国的にはAIやロボットの利活用などによって大きな労働力不足は生じないとされていますが、職種や学歴間では需給のミスマッチが生じるリスクがあるとしており、事務職や文系人材で大幅に余剰が出る一方、専門職や理系人材が不足するとしています。一方、北海道では、2040年時点では全体で約40万人の労働力不足が予想されており、事務職で余剰が出る以外は、ほとんどの職種・学歴で人材不足となることが見込まれています。

グランドデザインでは、以上のような様々な社会変化を踏まえながら、強い経済や地域社会の基盤となる人材の育成を目指し、取り組むべき取組例として、AIやデジタル技術を駆使しながら、社会課題の解決や地域発のイノベーションを興す人材の育成を目指した「専門高校の機能強化・高度化」、文系・理系にとらわれない幅広い教養により、新しい価値を創造する人材の育成を目指した「普通科改革を通じた高校の特色化・魅力化」、学校の枠を超えて多様な人々と協働し、社会課題を主体的に探究・解決できる人材の育成を目指した、全ての生徒のニーズや学びを支える「地理的アクセス・多様な学びの確保」が示されています。今後は、各都道府県における学校、地域、生徒の実情に応じた創意工夫ある取組を進めるため、各都道府県ごとに、グランドデザインを踏まえた「教育改革実行計画」を策定し、その計画を着実に実現できるよう、国で新たな財政支援の仕組みを構築し、地域人材育成の中心となる高校を広く応援し、高校生の学びを支援するとしています。

続いて「高校授業料の無償化」です。「高等学校等就学支援金制度」の改正に伴い、令和8年度からは世帯収入に関わらず、すべての生徒が授業料支援を受けられるようになりました。北海道教育庁の調査によると、この制度改正で生徒や保護者の進路選択の幅が広がったことにより、石狩学区では、今年、私立高校に入学した生徒が、前年度と比較して、3.7%、671人増加しております。市立高校では、清田高校のグローバルコースの入学者が定員を下回りましたが、それ以外は大きな影響は見られず、全体的に見ても高い出願倍率を維持しておりますが、今後どのような影響が出てくるか、その動向に引き続き注視してまいります。

続きまして、ここからは「(2)市立高校改革のあゆみ」について過去から振り返りながら、これまで市立高校がどのような改革を重ね、どのような取組を実践してきたのか、事例も交えながらご説明いたします。現在、全日制6校、定時制1校、中

等教育学校を含めると8校の市立学校がございます。来年4月には、藻岩高校と啓北商業高校を発展的に再編し新たに「彩輝高校」が開校し、令和11年度からは藻岩高校と啓北商業高校の閉校に伴い7校となる予定です。

これまでの市立高校改革では、大きく三つの取組を進めてまいりました。一つ目は「各学校の魅力化・特色化」、二つ目は「市立高校合同の取組」、三つ目は「地域等との連携・協働による学び」です。2003年の「改革推進計画」から始まり、2017年、2023年の「改革方針」へと段階的に推進しております。

一つ目の「各学校の魅力化・特色化」の具体的な歩みです。2004年の旭丘高校における「単位制」の導入を皮切りに、各校の特色を象徴する学科・コースの設置、多様な生徒の学びを支える、定時制・三部制・単位制の新しい学校である大通高校を開校をいたしました。近年では、2015年に開成高校を改編し、市内初の中高等教育学校として、開成中等教育学校を開校しました。開成高校時代から引き継いだ、理科・数学・英語に特化した専門学科である「コズモサイエンス科」としての取組と、開校に併せて導入した、国際標準の「国際バカロレア」の教育プログラムを活用した課題探究的な学習を生かして、国際的な視野で将来の日本を支え、活躍できる人材の育成を目指して様々な学習活動に取り組んでおります。

また、2021年には、各学校に期待される社会的役割である「スクール・ミッション」の再定義に加え、育成を目指す資質・能力や教育課程の編成、入学者の受け入れに関する三つの方針、いわゆる「スクール・ポリシー」を策定し、学校の魅力や特色を周知するとともに、入口から出口までの教育活動を一貫した体系的なものへと再構築しました。さらに2022年には、データサイエンスを学習のエンジンとし、理数分野を中心に幅広く教養を高め、学問・産業・社会的課題解決に貢献する人材の育成を目指す学科として、「数理データサイエンス科」を旭丘高校に開設しました。翌年には、市立高校で2校目となる、スーパー・サイエンスハイスクールの指定を国から受け、独自のカリキュラムによる授業展開や、大学・研究機関との連携、国内外の高校との交流、地域の特色を活かした課題研究などに積極的に取り組んでおります。

そして、来年の春には「彩輝高校」が開校します。彩輝高校では、普通科の「未来デザイン科」と、商業科の「ビジネスイノベーション科」を設置し、「地域と社会に学び、対話と挑戦を核に、探究と実学を通して学びを深め合いながら本物の経験を積み重ね、多彩な未来を自分の手で創れる人を育成する」をスクール・ミッションに掲げ、探究と実学を通じた学びを展開する予定です。普通科の生徒が商業の専門科目を履修できるなどといった学科や学年の枠を超えた「相互の学び」や、単位制による柔軟な時間割を活用し、月曜日の放課後などに「生徒自身が探究活動や部活動を主体的にデザインする時間」を確保できること、そして、すでに複数の企業や大学との具体的な提携相談を進めておりますが、学校外も含めた様々な大人たちが伴走し、多彩で実践的、探究的な学習活動を支える仕組みなどが特徴です。彩輝高校が行うこうした取組は、先ほどご説明した、国の高校教育改革の基本方針が目指す、地域発のイノベーションを興すことができる人材や、文系理系にとわら

れず、実社会につながる生きた学びを通じた新しい価値を創造する人材の育成にも寄与するものであり、これまでの本市の高校改革の取組を凝縮し、今後の高校教育改革のパイロットケースとなることを期待しております。

続いて、本市の取組の二つ目の特徴である「市立高校合同の取組」です。かつては、市立高校として共通して実施する取組はありましたが、基本的には、各校が単独で完結する教育プログラムを行っており、市立高校全体の繋がりはまだ薄いものでした。しかし、平成29年度以降の現行方針では、市立高校8校合同で共通のプロジェクトを展開する取組の充実を図ってまいりました。

こちらは、「進路探究セミナー」です。これは、市立高校に入学したばかりの約2,000名の新入生が一堂に会し、「なぜ私たちは高校で学ぶのか」「将来どのように社会に関わっていくのか」という、キャリア形成の土台となるマインドを共に耕す合同セミナーです。学校という小さな枠を超え、同じ「市立高校の同期生」として、多様な大人たちの生き方に触れ、高い志を共有し合うこのセミナーは、新入生が「夢や希望の実現に向けて、主体的に学び、探究する姿勢」を身に付ける上で、大切なスタートダッシュの場として定着しています。

そして、こちらは「学校間連携プログラム」です。市立高校の生徒であればどの学校からでも自由に参加・履修できる学習プログラムで、起業家教育プログラム「ミラスキ」、まちづくりを实践する「まなびまくり社」、食農体験を軸にした「アニマドレー」、魚をテーマにサイエンスやデザインを学ぶ「あかさかな」など、生徒たちは自分の学校の枠を「越境」し、多様なバックグラウンドを持つ仲間や、学校外の専門家と交わりながら、本物の体験をしています。活動風景に写る生徒たちの生き生きとした表情が、この連携事業の持つ教育的価値であり、一人一人の進路選択にも大きな影響をもたらしています。この学校間連携プログラムが、単なる放課後のボランティアやサークル活動と異なるのは、単位制の柔軟な履修制度を活用し、「地域で学んだ成果を、卒業単位として正式に認定する」という点にあります。

次に、生徒たちが日頃の探究学習などの成果を、自らの言葉で社会に向けて発信する場「市立高校プレゼンテーション大会」です。全ての市立高校から、約200名以上の生徒が参加し、ステージ発表やポスターセッションを行います。この大会は成果を競い合うコンテストではなく、市立高校の生徒が「お互いの学びから刺激を受け、高め合う場」とするとともに、中学生や保護者、市民の皆様に対して、市立高校のリアルな魅力を伝える場として機能しております。

続いて、本市の取組の三つ目の特徴である「地域等との連携・協働による学び」です。学校教育を学校内に閉じることなく、各学校で地域や大学、企業などと連携しながら、多様な活動を展開しておりますが、ここで重要となるのが、令和6年度から全校に配置された「高校と地域をつなぐコーディネーター」や「市立高校コンシェルジュ」の存在です。彼らは、単に「人と人を仲介する」だけの連絡係ではなく、日々、まちづくり、産業、教育の第一線で活躍する専門家であり、学校の中に、社会の多様なリソースや課題を接続するハブの役割を果たしてくれています。

その成果として、地域課題解決型プロジェクト学習の展開や、高校生のまちづくりへの関与、地域の企業・団体が一体となって生徒を支える組織の結成などが実現しました。また、高校生の視点を実際の市政に生かす「まちづくりコンペティション」では、優秀提案が実際に実施されるなど、本物の生きた取組みを展開しています。

最後に、卒業生および在校生を対象に実施したアンケートの結果です。社会に出るから必要となる「学んだことを応用する力」「課題や問題を発見・解決する力」、そして「他者と協働する力」のすべてにおいて、これまでの活動を通じて、多くの生徒が「高まった」と肯定的な回答をしております。特に卒業生においては、平成29年から令和3年度の卒業生に比べ、直近の令和4年度から令和6年度の卒業生の肯定的な回答が大幅に向上しており、これまで進めてきた「課題探究的な学習」が、単なる受験のための知識の丸暗記にとどまらず、社会に出て未知の課題に直面した時にこそ生きて働く力の育成に効果を発揮してきたものと考えております。

また、教育内容の満足度や、主体的に学ぶ力の育成、地域への貢献意欲などについても、多くの生徒から肯定的な回答を得ており、これまでの取組の成果が表れていると考えております。一方、「人生を主体的に生きているか」「将来的に札幌に貢献したい意識があるか」といった設問については、他と回答状況を比較するとやや低い数値となっており、今後の課題のひとつであります。現在の教育活動や学習生活を踏まえて、「もっと増やして欲しい学習機会は何か」という設問に対しては、「もっと自分の興味・関心に応じた授業を受けたい」「他の市立高校の生徒ともっと一緒に学び、他校の授業も受けてみたい」という、積極的で前向きな声が多く出ています。以上が、「高校教育を取り巻く現状」「市立高校改革のあゆみ」についての説明となります。

ここからは、検討会議の委員である、大通高校卒業の名達さん、開成中等教育学校卒業の谷さんから、高校時代を振り返っていただきながら、当時どのような学校生活を過ごしていたのか、当時の学びが現在のご自身の状況にどう繋がっているかなど、実際の声をお話いただければと思います。名達さん、谷さん、よろしくお願いいたします。

○名達 氏 名達 諒と申します。よろしくお願いいたします。私から、大通高校での学びと現在に繋がっていることをお話させていただきたいと思います。

私は、中学校で3年間不登校を経験した後、市立札幌大通高校を自分で見つけて入学し、現在は法政大学の通信教育部に在籍しながら、合同会社RaShiSaという会社を経営しております。

私は、不登校になったことで生まれて初めて学ぶ意味というものを考えるようになりました。学校というルールから一旦外れたときに、なぜ学校に行かなければいけないのかであったり、生きていくためにはどのような力を身に付けていけばいいのかということを考えていました。

大通高校を選んだ理由は、通信制の高校と比べて、毎日通学できるといったところと、ビジネスに興味があった私は、普通科の学校でありながら、商業の授業を受講できること、そして、ハチミツの商品開発販売の実践ができるといったところに魅力を感じたことです。

大通高校に入学した私は、その後、素敵な先生方に出会うことができ、起業したいという私の夢を応援してくれる方々に出会いました。先生方には、起業家を紹介してもらったり、学校外プログラムへの参加を提案してもらったりなど、決して答えを教えてくれることはなく、自分で答えを見つけるための方法を示してくれたり、問いを立てて導いてくれるといったような支え方をしていただきました。その中で、私は自分の成長であったり、自分を実現していくことの楽しさに目覚め、課外活動に積極的に参加していきました。

しかし、活動に積極的に参加していると、学校の中では意識が高い人として見られてしまい、「すごいね」と声を掛けてくれる友人は増えたのですが、一緒に活動してくれる仲間にはなかなか出会えませんでした。そのような中、先ほどご紹介のあった「学校間連携プログラム」に参加した際、他の市立高校の生徒たちと仲間になって一緒に一つの目標に向かうという経験を積むことができました。また、このような活動経験から、道外の学校に補助を受けて行かせていただくといった貴重な機会もいただくことができました。

そのほか、私は、この経験を学校内で生かすことができないかと考え、1年間、生徒会長として活動をしました。私の集大成というべき活動が、校内でクリスマスツリーを作ったことです。学校の目安箱に「クリスマスの装飾をもっとしてほしい」であったり、「イベントが少ない大通高校をもっと盛り上げてほしい」という内容があったのですが、なかなか予算がなく実行できないという状況でした。そこで、学校外で繋がった知り合いの大工さんに自分から交渉をして、実際に工房に行き、木を切ってボルトを打つところからクリスマスツリーを作るという企画を実行することができました。今もそれが大通高校に飾られているということが個人的にすごく嬉しいです。

探究という活動は、自分の輪郭を知ることだと思っています。大学を受験するための材料作りであったり、学校の中で生徒として評価されるためにあるものではなく、自分自身を探ることであったり、こういった問いを立てて実行して、また振り返りをして、さらにブラッシュアップしていくというような流れを組むことができることが、探究学習の強みだと思っています。

そして、この高校時代の経験と学びが今の活動に生きています。昨年設立した合同会社RaShiSaでは、経営が全くわからないところからスタートしまして、今も答えのない問いにぶつかっているのですが、少しずつ探究して進んでいくということを繰り返しています。

現在、最も力を入れて行っているのが、「喫茶こともし」という喫茶店です。高校生まで無料でドリンクを提供するという取組を行っておりまして、これには私の高校時代の背景があります。親や先生に起業したいという相談をできずに困ってい

たときにこの喫茶店を見つけて、大人と繋がる機会であったり、第三者の大人を頼るという機会をいただくことができました。これを次の世代に繋げていきたいと思っており、今、この喫茶店で実際に市立高校の生徒も10名から20名ほど利用していただいております。

最後になりますが、本日、私が伝えたいこととしましては、実際に私が高校時代に先生方に支えていただいたことを経験して、先回りして答えを教える効率的なやり方ではなく、生徒の力を信じて待ってくれる、そして導いてくれるといった関わり方をさせていただくことを期待したいと思っております。そして、私もこの出会いから始まった探究を、自分を見つける探究へと昇華させて、次世代にもそういった関わりをできるようにこれからも頑張っていきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

○谷 氏 市立開成中等教育学校4期生の谷 郁果と申します。今日はこのような貴重な機会をいただきましてありがとうございます。私の市立高校での学びとその学びが現在にどう繋がっているのかということについてお話をさせていただきます。

私は、2015年に市立札幌開成中等教育学校に入学しまして、私たち4期生が初めての6年間教育の生徒でした。開成中等教育学校卒業後は、2021年に北海道大学教育学部に入學し、4年間の大学生活を札幌で過ごした後に就職し、現在は社会人2年目として旭川市で生活しております。

私が6年間過ごした開成中等教育学校について紹介させていただきます。学校教育目標「わたし、アナタ、min-na そのすがたがうれしい」を印象的に覚えていることをこのたび思い出しました。この言葉を、先生方も生徒たちもことある毎に口にしていたなということを思い出します。下の表が教室に掲示されておまして、生徒と大人が双方に関わり合いながら探究活動や学校生活を送っているという学校でした。開成中等で学んだことを思い出してみると、本当にいろいろなことを学習したなと思い出され、ここにあるのは様々な教科で取り組んだレポートの内容であったり、グループ活動のテーマであったり、一つ一つたくさんお話ししたいことがあるのですが、その中でも中央にある「農家での宿泊」にフォーカスを当てたいと思います。

これが、先ほどご紹介のあった「学校間連携プログラム」の「アニマドレー」というものです。私は、この活動に2年間参加したのですが、アニマドレーというのは、農業と食に触れてキャリアを考えるプロジェクトになっています。私は2年間参加したうち1年目はファームインコースといって農泊体験と農泊体験で関わった農家さんの思いを伝えながらオータムフェスタで野菜を販売しました。2年目はバイヤーコースといって仕入れや値段設定といった活動をしてきました。たくさんの大人や大学生がいて、学校外でたくさんの学びがあるといった場所でした。

この学びの場を通して、私は三つのことを学びました。一つ目ですけれども、自分の足で農家さんを訪れたり、店舗での販売活動を行ったりして、五感を使って活

動して机の上だけではなくて自分の体を使って学んでいくということ、大人や先生も一緒になって、ともに学び合うということ、そしてそういった場や大人たちの出会いから、これからの未来を開いて期待して、それに対して努力していくということを学んだと思っております。アニマドーレだけではなくて、開成中等での6年間で気づかせてくれたことがその後の大学生活や今にも繋がっているなど感じております。

大学生活では、自ら飛び出して行って、学びと出会いを重ねて自分自身の自己理解や、他者からの学びが楽しいとアニマドーレで学んでいたのも、自分でアニマドーレを運営していたNP0法人に飛び込んで、食育プログラムを開発してみたりですとか、また、北海道の様々なゲストハウスに行き滞在してみるですとか、北海道の各地方に行き子どもたちに対して学びの場を作る企業のインターンとして活動したりですとか、いろいろなところで自分の足で行き、自分で学ぶということを繰り返した4年間だったと思っております。

二つ目ですけれども、アニマドーレの「大人も一緒に学ぶ」、「大人と生徒が一緒に学ぶ」といった、双方向の学びの場の必要性や重要性を感じており、そういう場がもっともこの世界にあるべきだと感じていたのも、これらを大学在学中の卒業論文のテーマとしました。地域と協働した学びの場における解放機能ということで、内容を少し抜粋します。アニマドーレという学びの場では、生徒や教師、教師以外の大人が全て対等な関係性を築き、学校空間に埋め込まれた教師と生徒の関係性を乗り越えたコミュニティの中で、ともに対話を重ね社会を見つめていくという構造を示し、そういった場の必要性を感じられる論文としました。

そういった開かれた場というのが、社会にもっとあるべきだと思っております。どこに生まれ育っても、みんなで学び合い、対話を重ねてともに社会を作っていく、そういった未来を作るために私は社会と今も関わり合っているなどと思っております。「未来を胸にできる」、「口にできる」というのも、いろいろな大人たちが「未来は作れる」ということを示してくれたり、楽しく生きる大人たちと出会って、そういった大人たちが背中をわくわくを見せてくれたからだなどと思っております。

開成中等での生活では、大人も生徒もともに学び合い、学びを楽しみ、そして学校という中ではもちろん、学校外に開かれた学びの場を多く作ってくださっていたことから、私は自分自身の足で世界に飛び出して、そこで学ぶことの楽しさや、出会いの嬉しさを実感することができました。そしてたくさんの大人たちが見せてくれた背中のおかげで、私自身も今、未来にわくわくして未来を描き、それを作ることができる・実現することができるということを信じて、今も社会と関わっているなどと思っております。

開かれた学びの場や、様々な出会いの扉、そして楽しそうな大人の姿など、その必要性和大切さを皆様にお伝えできればいいなと思い、このたびお話しさせていただきました。ありがとうございました。

○**秋元市長** ありがとうございます。ここで質疑の時間を取りたいと思います。これまでの事務局の説明、それから卒業生のお二人のお話を聞いて、何かご質問等がありましたらお話いただければと思います。

○**朝倉委員** 朝倉です。私からは、卒業生のお二人から聞いたお話に対して感想とご質問をさせていただきたいと思います。

名達さんからの話を聞きまして、自分も子育てをしているものですから、どうしても答えを自分から言ってしまうなと思うところがあります。答えは子どもが自分で見つけれられるように、大人たちがサポートしていくことが大事なのだという事をととても感じましたので、このお話を家に持って帰りたと思います。学校もそういった形の環境づくりが本当に大事だなと思います。

名達さんに一つご質問なのですが、不登校を経験されたということで、大通高校に行ってみようと思ったきっかけを教えてくださいたいと思います。

○**名達 氏** 大通高校に行こうと考えたきっかけは、中学校3年間、学校に行っていなかったことで内申点が足りず、行ける学校が限られていたということが正直なところなのですが、通信制の高校ですと自分が怠けてしまうのではないかという不安があったことと、中学3年間、人と関わることから離れていたのも、コミュニケーションが減り将来への不安がととても大きかったということがあります。

そんな中、大通高校が市立高校で、かつ定時制の学校だということを知り、自分が中学校時代にできなかった青春みたいなものを、大通高校でできたらいいなと思ったのがきっかけです。ちなみに、最初に学校を見つけてくれたのは母でした。

○**朝倉委員** ありがとうございます。親御さんがきちんと見ていてくれたんですね。

谷さんにも感想と質問です。アニマドレーという、いろいろな立場の人が対等にお話できる場に参加されたとのことですが、大人も学ぶことが大事で、いつまでも自分自身が勉強していかなきゃいけないなと思っているところです。大人がかっこいい姿ですとか、楽しそうな姿を見せることが一番の子どもたちの教育になるのかなと感じていて、とても共感したところがございます。

アニマドレーなどのいろいろな活動について、これらは自分で見つけていったのでしょうか。それとも学校の先生や先輩から話が合ったのでしょうか。

○**谷 氏** ありがとうございます。大学時代は、自分で見つけて何となく面白そうだから飛び込んでみるということが多かったかなと思います。アニマドレーに関しては、学校の中でアニマドレーを経験した先輩が、全校生徒に向けて話す校内のプレゼンテーション大会のようなものがあり、そこでお話を聞いて楽しそうだな、私も参加したいし羨ましいなと思って参加したことを覚えています。